

めでいかすとり Médicastre



「 午年の年男・年女 」



年頭のあいさつ

一般社団法人 鶴岡地区医師会
会長 三原 一郎

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては、決意を新たに良き新年をお迎えのことと謹んでお慶び申し上げます。

昨年は、医師会長として2年目の年でした。会長職の多忙さと責任の重さに、いささかたじろぐこともありました。役員、会員また職員の皆様の温かいご支援とご指導のおかげで、なんとか、大過なく新年を迎えられたことにまずは感謝申し上げたいと思います。以下、年頭に当たり昨年を振り返りながら、今年の課題、抱負などを述べ年頭のあいさつに代えさせていただきます。

医師会の各種事業の運営は、概ね順調に運用されていると評価しています。今年が目新しいところとしては、佐藤局長が昨年末で勇退され、今年から御橋局長、菅原次長という新しい事務局の体制となります。また、准看護学院もフレッシュなメンバーに変わります。また、湯田川温泉リハビリテーション病院の老朽化、狭隘化が顕在化しており、今年は今後の方向性がある程度決めるべき時期にあると考えています。他の事業については、今年はとくに大きなイベントの予定はありませんが、現状を高いレベルで維持しながらも、少しずつでも前進できればと思っています。

地区医師会の本来の役割である地域医療への貢献に関しては、ここ数年取り組んできた緩和ケア普及のためのプロジェクト、地域連携パ

ス、医療情報のIT化、在宅医療連携拠点事業なども順調に推移しています。

庄内プロジェクトは、国の委託事業終了から3年が経過しましたが、南庄内緩和ケア推進協議会を運用母体とし、研修会、症例検討会、講演会などを継続しながら在宅緩和ケアのさらなる普及を目指し活動を続けています。今後さらに進めていかなければならない在宅医療のモデルとなる大事な事業ですので、医師会としても全面的にバックアップしていきたいと考えています。

地域連携パスに関しては、昨年10月から新たに心筋梗塞地域連携パスの運用を開始しました。心筋梗塞パスのIT化では、Net4Uとの連動を可能とした新しい仕組みを導入しています。脳卒中パスに関しては、昨年は一昨年に引き続き維持期を含めたパスデータの解析を行い、集計表第2号を発刊することができました。また、今年は大腿骨近位部骨折のデータを4年分まとめた集計表を発刊予定です。なお、昨年11月に盛岡で行われたクリニカルパス学会には、鶴岡から総勢17名が参加し、8演題を報告しました。うち、庄内病院からの脳卒中パスに関する報告が優秀賞にノミネートされ、さらに、座長賞を3つ頂きました。これほど活発な地域連携パス活動は、全国唯一だと誇らしく思っています。一方で、県からの補助金が打ち切りになったことで、今後の運用費をどう捻出するのかという大きな課題を突き付けられて

います。緩和ケア推進協議会、地域連携バス、「ほたる」など、地域全体に関わる事業の活動費用をどう捻出するか、負担をどう按分するか、検討していかなければなりません。

新Net4Uは調剤薬局、介護系施設への普及が進み、文字通り、「医療と介護を繋ぐヘルスケア・ソーシャル・ネットワーク」としての役割を担うシステムに成長しています。ITは今後の在宅医療に欠かせないツールであることもあり、佐久を含め多くの視察を受け入れました。来年度には、Net4Uの佐久での試験運用が決まっており、念願のNet4Uの鶴岡以外での導入が期待されます。

在宅医療連携拠点室「ほたる」は、国の事業が終了したこともあり、地域医療連携室「ほたる」と名称を変更し、在宅医療を支援するさまざまな活動を継続しています。とくに、歯科医師会、薬剤師会、行政との定例ミーティングを継続することで、在宅医療における、歯科や薬局との連携はかなり進みました。一方で、上でも述べましたが、地域全体に関わる機能を担う「ほたる」のような部署の運用費を誰が負担すべきなのか、そのあり方が課題となっています。今年、「ほたる」を今後とも継続可能な組織としていくための方策を、NPO法人化も視野に入れて検討していきます。

昨年1月から「医師会長だより」の配信を開始しました。医師会の多岐にわたる活動を会員、職員に知ってもらいたい、会員と役員との距離を縮めたいという思いで始めたものですが、私自身の勉強の場にもなっています。インターネット上にブログとしても公開していますが、毎日100人以上の訪問があり、行政の方々にも読んでもらっているようで、医師会以外の方々に医師会の活動を伝えるという役割も果た

しています。昨年は250通を超える配信をしましたが、今年も継続したいと思っています。是非、目を通していただき、情報を共有するとともに、医師会のあるべき姿を皆で考えていければと思っています。

2025年をピークに高齢者は減少に転じますが、2040年までは医療依存度、介護依存度の高い85歳以上の高齢者が急増し続けます。また、高齢化に比例して認知症も増加しますし、さらには独居世帯も増えていきます。今後20数年間は、高齢者をどう支えていくかがどの地域においても大きな課題となっています。

超高齢社会が進行する中、医療に求められる姿も大きく変わりつつあります。われわれ医療者には、質の高い医療を提供していればよいというだけではなく、介護・福祉に携わる人たちや行政とも連携しながら、その人がその人らしく生き抜けることを支えるという視点も必要になってきています。医療とは、単に病気を治すだけではなく、人と人の触れ合いを通して、人を診る、さらには地域を診るという医療の根本が見直される時代になってきたともいえます。ノーマライゼーションとは、障害をもっていてもできるだけノーマルに近い生活ができることを保証する社会のことですが、これからの超高齢社会では、認知症になっても、障害を抱えていても、独居であっても、その人らしく、安心して暮らせるシステムが必要です。そのために、医師会がやれることは何なのか、今後とも考え抜いていくべきテーマだと思っています。

今年一年の皆様のご健勝とご多幸を心より祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

年頭のごあいさつ



「脳死下臓器移植医療」について

鶴岡市立湯田川温泉リハビリテーション病院
院長 武田 憲夫

鶴岡地区医師会会員の皆様、明けましておめでとうございます。私にとっては初めての鶴岡での年の暮れ、お正月なので、どんな様子なのだろうと興味半分、面白半分で年の暮れ、お正月を迎えました。こちらのおもちは四角では無く「まあいい」こと、「2年参り」について看護師さんに話したら、「なにそれ？ 聞いたことない」といわれたこと、雷様は夏では無く冬に暴れることなどなど。また、暮れのある日、突然家の周りで法螺貝の音が鳴り響き、「なにこれ？」と思ったら、何と、出羽三山神社の修験者が、各戸を訪問していました。我が家も「松の勧進」を差し上げ、法螺貝を吹いて家の安寧を祈念して頂きました。この様なことも、出羽三山神社に守られている鶴岡ならではの嬉しくなりました。

さて、話は変わりますが、本稿では、私が山形県立中央病院時代から係わってきている、「移植医療の推進」について少しご紹介させていただきます。御存知のとおり、日本では、1997年、「臓器の移植に関する法律」（法律第104号）が制定され、遅れていた日本の臓器移植医療がようやく欧米並みになり、移植によってしか命が守れない方々に、生命の灯火がともったと思われました。しかし、「臓器移植」、「脳死判定」があたかも科学的ではないとも捉えかねないメディア、一部の（有？）識者の議論に押されてか、国民は臓器移植に高い

ハードルを課してしまったように思います。この為、日本での脳死下臓器移植例は、移植でしか生きられない患者さんの数と比べ、圧倒的に少ない症例しか出ていません。図1は山形県における腎臓移植希望者登録数と腎移植を実際に受けることが出来た患者数です。腎移植は、必ずしも脳死下移植が必要ではありませんが、90名ほどの患者さんが待機しています。この6年間で腎移植を受けられた患者さんは登録数の10分の1の9名。しかも内7名は肉親間から多い生体腎移植です。人工透析は週2日から3日、1日8-9時間拘束され、定職に就くこともままなりません。近年は、臓器提供者が出た県のレシピエントに優先的に移植することも公表されており、その方針で行くと山形県の待機患者さんは、移植の登録をしても10年20年待っても移植の可能性は極めて低いと言わざるを得ません。図2は、日本と各国の人口100万人当たりの年間臓器提供者数ですが（厚生労働省データより）、日本は欧米の30分の1、20分の1の提供数です。図3は、ある年の肺と心臓の国別移植件数です。各国の人口は、フランス、イギリス約6千万人、ドイツ8千万人、日本1億3千万人ですので、如何に日本の移植件数が少ないかがお分かり頂けると思います。その後、国もそのような状況を認識し、2010年（平成21年）7月に臓器移植法を改正しました。この改正臓器移植法の大きな改正点は、本人の意志が不明であっても、臓器提供を拒否し

ていなければ、家族が書面により承諾したときは提供可能となり、これにより15歳未満（但し生後3ヶ月以上）の臓器摘出が可能になりました。この法案により、脳死下臓器提供件数がやや伸びておりますが、まだまだ欧米並みとは言えません。

山形県では、平成13年に「山形県臓器移植推進機構」を設立し、長年理事会を中心にその推進、普及に向け様々な形で議論されてきましたが、普及啓発の有効な方策は中々見出せませんでした。そこで、県は平成24年8月、「臓器移植推進専門部会」を立ち上げました。本専門部会は、行政と医療現場が臓器移植推進、県民への啓発という目的の下に、県内で臓器移植医療に前向きに取り組んでいる施設の医師、看護師、事務など実務担当者が中心になって構成されています。庄内地区からも、日本海総合病院脳神経外科赤坂先生、ICU看護師長本間さんが参加しています。本専門部会は不肖私が部会長を務めておりますが、1年半の間に5回部会を開催しました。そこでの議論は現場の熱い雰囲気凝集され、活発な意見が交わされ、多くの有意義で建設的な提言、アドバイスが出てきました。この議論をもとに、平成25年度から始まった「第6次山形県保健医療計画」の臓器移植部分が作成されました。この中に、一般の方への啓発、県内医療施設へのサポート、協力依頼などが含まれており、今後暫時各施設、医療圏に足を運んでこの計画を実現させて行く予定です。

繰り返しになりますが、移植医療、特に脳死下移植は、脳死となった決して助けることのできない患者さんの臓器を、移植でしか生きられない方へ移植し、それにより新たな命を再生する、命のリレーをサポートする医療です。臓器

を提供する側は、自らの臓器の提供、大切なご家族の臓器の提供という非常に重い決断が必要ですが、人を愛する、生命を愛する、心の優しさ、温かさと言った人間の心の根幹に依存する医療であり、ある種のすがすがしさを感じるのは私だけでしょうか？ 多くの患者さんが声を出せずに、命の時計を前にして移植を待っていらっしゃる。庄内の地にも、臓器移植への前向きな気運が広まることを心から願っています。

図1 山形県における、腎臓移植希望者数（待機患者数）と腎移植件数（年次推移）

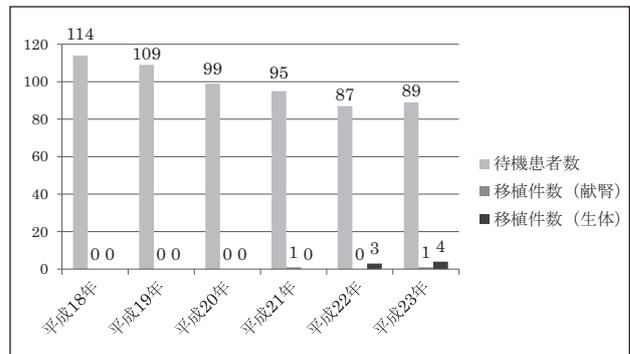


図2 国別、年間臓器提供者数（2007年）

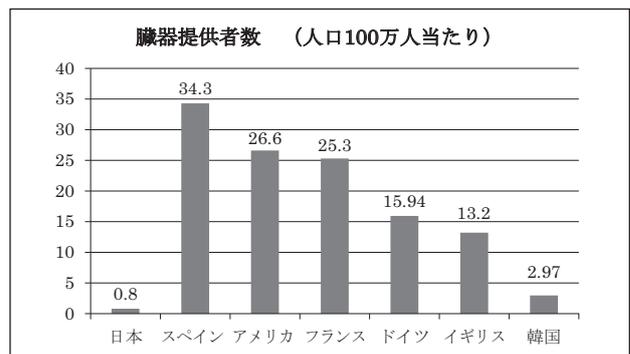
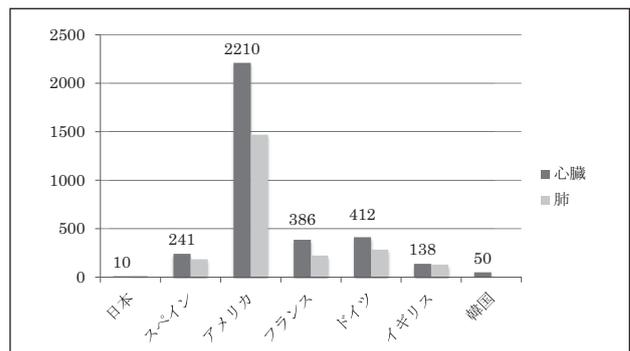


図3 国別臓器移植（心臓、肺）件数（2007年）



表紙写真にご協力いただいた先生の紹介（敬称略）

加藤 知邦	黒羽根 秀機	佐久間 豊明
須貝 孝一	福村 直毅	菅原 真樹



ご協力ありがとうございました。

原稿募集中！

趣味・話題・旅行記・想い
いれがあるもの・大切な思
い出の出来事等なんでも構
いません。

総務課までご一報を！





新年の抱負（年男・年女）



加藤 知邦（湯田川温泉リハビリテーション病院）

あけましておめでとうございます。

あっという間に一回りし還暦を迎えることになってしまいました。周りのご老人達を見るとまだまだ若造ですね。もっと頑張っって仕事をしなければと思います。

「頑張るぞー!!!」（無駄に気合いを込めて）。

黒羽根 秀機

10年余、お世話になった湯田川温泉リハビリテーション病院を昨年9月一杯で退職。ヒマもできましたが、新しい発見と体験がありません。本年は年男、馬力が残っていれば、もう少し駆けたいと願っていますが…。

佐久間 豊明（さくまクリニック）

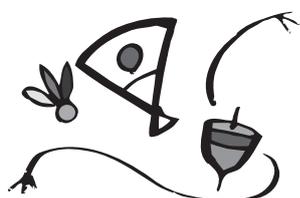
皆様あけましておめでとうございます。

今年は、年男で還暦… じえ！ じえ！ じえ！
もうこんな歳になってしまっって!!

まだ一丁前になっていない子供もいるし。長期休みをとって、女房とイタリアのモデナでFerrariの工場見学したいし。

まだまだじじいにはなってられません。

今年も謙虚と感謝の気持ちを忘れずに頑張りたいと思います。



須貝 孝一（県立鶴岡病院）

人生5回目の午年。新病院がオープン、来年は私の在鶴岡20周年！ 気負わず楽しみながら仕事したいです。

今年はストーンズと、伝説のプログレバンド「ノヴェラ」の再編ライブもあって楽しみ。

私は多少ギターを触る人なのですが、無謀にもエレキバイオリンを手に入れ、ロックな音作り？でバイオリン弾いて遊ぶのが最近のマイブーム。

すぐ挫折するでしょ、と家族は冷たいですが、いつかは技巧的な演奏ができる人になりたいです。（笑）

福村 直毅（鶴岡協立リハビリテーション病院）

謹んで新年のお慶びを申し上げます。旧年は多くの先生方にご指導ご協力いただき感謝申し上げます。能力と人権の医療であるリハビリテーションを活用し地域発展に尽くす所存です。ますますのご声援をお願い申し上げます。

菅原 真樹（鶴岡協立病院）

新年明けましておめでとうございます。

今年は年男ということで、より一層地域医療の発展に貢献できるように頑張っていきたいと思っいます。どうぞよろしくお願っします。

個人的には、陸上で5000メートル16分台を狙ったいです。

第33回 市町長・部課長、庄内保健所、荘内病院、鶴岡病院、医師会役員懇談会

日 時：平成25年12月18日(水) 18：30～
場 所：ベルナール鶴岡

師走に入り寒さも本格的になってきた去る12月18日、第33回市町長・部課長、庄内保健所、荘内病院、鶴岡病院、鶴岡地区医師会役員懇談会がベルナール鶴岡で開催されました。

土田副会長の司会進行で、三原会長と榎本鶴岡市長のごあいさつの後、4題の話題提供が行われました。

最初は、庄内保健所所長松田徹先生より「鶴岡市・三川町大腸がん検診QC委員会報告」について、鶴岡市では大腸がん検診の受診率は高いが精検率が低く、市民の精検率は向上してきてはいるが、職域へのアプローチがまだ充分ではないので、今後、さらなる精検率向上のため、啓発等様々な取り組みを行っていくとのご報告がありました。

次に、鶴岡病院院長神田秀人先生より「虐待事例において子どもと親の主治医になることの利点」と題し、発達障害などの障害傾向にある子どもは虐待を受ける割合が高く、親が精神障害を有する場合は子供に虐待する割合が高い。親と子両方を診ることで母子関係が改善した虐待事例をあげられ、家族を丸ごと診る主治医が必要であることを説明されました。

続いて、三原会長より「地域包括ケアシステム実現に向けて」と題し、地域包括ケアが必要な背景・新しいシステムの必要性を説明され、市全体として取り組む課題であり、地域医療の全体像・将来像を検討する部署（チーム）、さらには地域包括ケアシステムを統括する部署（チーム）の設置が必要であると提言されました。

最後に湯田川温泉リハビリテーション病院院長武田憲夫先生より「鶴岡市立湯田川温泉リハビリテーション病院の将来ビジョン」について、病院の現状、近未来に向けた医療体制の整備・構築、老朽化した設備・医療機器、狭隘化した施設等におけるビジョンについて提言されました。

引き続き、隣の会場に移動し、阿部三川町長の乾杯のご発声で懇親会が行われ、和やかな雰囲気の中で、意見交換が行われました。

これからの大きな課題である少子超高齢社会に取り組んでいくためには、医療と行政が意見を出し合い、情報を共有し、連携を深めることが大事だという事を再確認した会となりました。

在宅サービスセンター
事務課長 芳賀 直美



表 彰

この度 次の先生方が栄えある表彰を受けられました。誠におめでとうございます。



黒沢眼科医院
黒澤 久子 先生

地方教育行政功労者表彰

長年にわたり地方教育行政の発展に貢献された功績が認められ、文部科学大臣より表彰されました。

(9月27日表彰)



荘内病院
伊藤 末志 先生

公益社団法人 母子保健推進会議会長表彰

長年にわたり母子保健事業及び家族計画事業の推進に貢献された功績が認められ、母子保健推進会議会長より表彰されました。

(10月17日表彰)

石原小児科医院
石原 融 先生

保健衛生関係功労者山形県知事表彰

長年にわたり保健衛生業務の発展向上に寄与した功績が認められ、山形県知事より表彰されました。

(12月13日表彰)

特別寄稿

地霊の生みし人々 — 悲劇の^{ものふ}武士 酒井右京（上）—

黒羽根整形外科 黒羽根 洋司

人はどう行動すれば美しいか、江戸時代、武士と呼ばれる人々は常にそのことを考えた。

名誉のためには命をも捨てるというのが彼らの倫理であった。しかし、徳川260年の歴史の中には、理の立つ^{ことわり}ところで腹を切った武士など数えるくらいしかいなかった。彼らの多くは理不尽を承知で従容として死の座についた。庄内の地にも、切腹をもって己の潔白を示し美学を貫いた一人の武士がいた。

幕末藩内事情（その1）

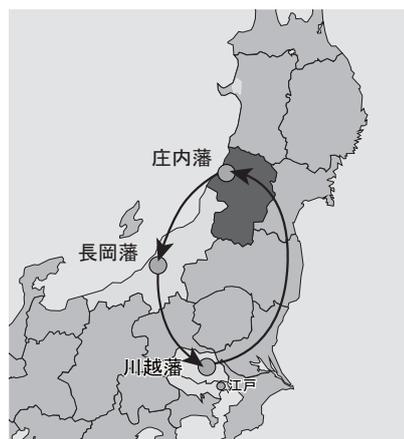
庄内藩酒井家には「両敬家」と呼ばれる、藩主の連枝でもあり、家臣というよりは代々客分の家格の名家が存在した。その一方の家に生まれた酒井玄蕃は、文政3（1820）年に家督を継いだ。

天保11（1840）年のいわゆる三方国替えの幕命が出された時、玄蕃は十代藩主忠器^{ただかた}に仕え、中老の要職にあった。ここで、三方国替えとは庄内藩を長岡藩へ、長岡藩を川越藩へ、川越藩を庄内へ転封するという突然の幕府からの命令である。当時の将軍・家斉が川越の松平家に養子にやった我が子^{なりやす}・斉省可愛^{ただあき}さから、あるいは老中水野忠邦の野心から発せられたと言われる。晴天の霹靂ともいふべき幕命に、階層、身分を問わない藩民挙げての阻止活動が展開された。

玄蕃は江戸留守居役・大山庄太夫、公事師・佐藤籐佐（本シリーズ6、7に詳述）等と協力して転封阻止に奔走する。この藩を揺るがす事件は、結局幕命撤回をもって解決した。後年、天保義民と称される快挙を題材に、藤沢周平は



酒井忠器



「義民が駆ける」として筆を執る。

酒井玄蕃は同年15（1844）年に、その前々年に藩主を嗣いだ忠発^{ただあき}の下で家老へ進む。しかし藩政についての度々の諫言は忠発の容れるところとならず、却って退けられ嘉永元（1848）年8月家老を免ぜられた。翌年、玄蕃は家督を弟^{のりあき}・了明に継がせ隠居し右京と名のる。この評伝でも以後は酒井右京と呼ぶ。

次いで右京のあとに家老となった松平舎人も嘉永6（1853）年亀ヶ崎城代（現在の酒田市）に左遷される。両敬家のもう一方の雄・酒井奥之助は、通算19年務めていた家老を嘉永4

(1851)年に辞めさせられて隠居の身となる。忠発にたいする直諫の老職はすべて遠ざけられた。新藩主が先代の側近たちを疎ましく思うのは、現代の会社組織などにも通じることだろうが、忠発の場合、異常とも思えるほど徹底していた。

江戸で忠器に才幹を見出され、かつては江戸留守居役として活躍した大山庄太夫もその一人である。大山は、葛飾北斎の弟子で服部北李とも号した在府の武士・恒斉の子として生まれた。庄太夫は頭脳明晰で弁舌が立ち、「名声都下に震い、神田酒井の大山と称し、知られざる者無きなり」(『時敏夜話』)と言われた。その住まいは大山御殿と称され、昼夜来客が絶えることなく、門前に槍の4、5本は立たぬ日はないくらいであった。

120石の中級武士を継いだ大山庄太夫が要職を上り詰めることが出来たのは、一つに彼の持って生まれた資質と出自にある。世才と交際の機微は江戸育ちの大山にとって生まれながらのものであり、国許の士族たちにつきまとう係累の煩わしさが薄かった。二つ目は、よき後ろ盾と理解者の存在である。10代藩主忠器は、この偉才を愛し、実力を発揮できる場を与え続けた。両敬家と称される酒井宗家に繋がる藩の重鎮たちも大山の人柄と見識を高く評価し、大山もそのつど期待に答えていった。こうして、酒井右京をはじめとした前藩主忠器の側近で形成される守旧派と、現藩主忠発につく君側派の確執は次第に深まり、その対立は大きくなっていった。

幕末藩内事情 (その2)

嘉永6(1853)年ペリーが浦賀に来航して開港をせまった。それは、徳川封建制の諸矛盾を一挙に噴出させる引き金であり、近代日本を生み出す激しい陣痛の始まりでもあった。天下動

乱の波は庄内にも押し寄せずにはおこななかった。

「庄内も、昔のように徳川ばかりではやっていけません」(藤沢周平『回天の門』)と、若い志士たちに語る大山庄太夫の言葉は、酒井右京を中心とする改革派の共通した認識であった。時勢の動向に即応して藩政を刷新したいと願う彼らにとって、守旧佐幕に固執する現藩主忠発とその取り巻きは打倒すべき対象となっていた。

天皇家と幕府が一緒になって外国の圧力に対抗していこうという、いわゆる公武合体論をもとに藩政刷新を志す彼らは、矢継ぎ早に新藩主擁立の策を講じた。しかし、彼らにとっての最大の悲劇は、これらの計画がことごとく失敗することである。その一つ、忠発の嗣子である忠^{ただ}恕^{ひろ}の擁立工作をみてみよう。忠恕の妻は土佐藩主の次女であり、公武合体派の巨頭・山内容堂の義理の叔母にあたっていた。容堂を後ろ楯にして難局を打開しようとする彼らの謀議は、庄内下向中の忠恕急逝によってあえなく瓦解する。20歳のあまりにも若いこの死には謎が多く、藩佐幕派の布団蒸しによる圧殺死という説も当時語られたという。

いつの世であれ、現政権に絶対的権力を握られている以上、その廃立は至難の業であり、死をも覚悟しなければならない。水も洩らさぬ細心綿密な計画と果敢な実行をもってしなければ、とうてい成功はおぼつかない。その点、改革派のとった方法は、悲劇を必然とする甘さもあつたことは否定できない。

慶応2(1866)年中央では薩長同盟が成立し、時勢は討幕へと雪崩をうった。庄内は凶作になり、窮民多数が集結して免税の嘆願をするなど、不穏な情勢にあつた。この集会の裏には大山らの扇動があると噂された。

庄内藩を舞台にした幕末暗闘の史劇は、藩内外の動きも手伝って、悲しい結末に急いでいた。

私のカメラ歴 わたしのお気に入り

教養課程の2年間、世田谷高井戸に通学していた頃、新宿西口の中古カメラ店でブラックライカ エルマー F3.5付を見つけた。程度は悪く、ボディ周囲はエナメルがとれて地金の青銅が出ている。距離、シボリ等は全部手動で、視野は固定でした。フィルムを入れ撮影したがほとんどがぼけている状態でした。医学部専門課程になってから、キャノン II B という距離のシボリ方が半自動（異相差機能）のカメラを購入し、本当は金が充分あればキャノン 4 S_bが欲しかった。キャノンのレンズはエルマーより解像度が良いことが分かりました。その後オリンパスムーブという広角レンズ付きや二眼レフレックスの初めて売り出されたペンタックスが出て、その機能のすばらしさと低価格に驚き、購入。

インターン終了後、医局に入り半年後虫垂切除術1例施術。山下汽船の船医として東南アジアに4か月間出張。4年後、父の老齢化により帰郷し、鶴岡医師会の写真クラブに入りました。やがてデジカメの時代になり、ニコン D 200 購入。その後ペンタックス Km・Kx、更にキャノン EOS キス、ペンタックス K30、キャノンパワーショット G16、キャノン EOS M 等々、私の周囲には写真機だらけです。よく考えてみると私は写真を撮るより、カメラのメカニズムへの興味で購入していると感じます。最近ではモデル数、機能のチェンジ等がさかんで、高価になり、追いつかなくなりました。写真クラブの大先輩の真柄先生と永眠される3～4か月前に同じカメラ屋で偶然お会いし、ニヤと笑顔をかわした事が思い出されます。

（佐藤 元昭）



めでいかすとる

表紙募集

医師会総務課まで

写真、絵画、etc...



編集後記

新年あけましておめでとうございます。

今年は雪も少なく比較的過ごしやすい天候でしたが、皆様どのようなお正月を迎えられたでしょうか？

昨年末で長年勤められた佐藤耕一事務局長が退任されました。長い間いろいろとご指導、ご活躍頂きありがとうございました。事務局は新たに就任された御橋事務局長、菅原事務局次長を中心とした体制になります。よろしくお願いいたします。

荘内病院は土日を含め、年末年始の休みが9連休となりました。救急センターを受診した患者数は例年より若干減少しましたが、連休中は元旦に行われたくも膜下出血の手術など14件の緊急手術が行われました。“にこふる”の患者数はまだ把握していませんが、一次救急の患者さんを多数診て頂いたことと思います。担当された諸先生には感謝申し上げます。

今年は診療報酬の改定が行われます。まだ正式に発表されていませんが、消費税増税も絡んでなかなか厳しくなるようです。荘内病院でも早めの対策を行うように考えているところです。

今年が会員の皆様にとってより良い年になりますように…。

また、引き続き“めでいかすとる”への投稿をよろしくお願いいたします。

(石原 良)

編集委員：伊藤 茂彦・福原 晶子・石原 良・中村 秀幸・斎藤 高志・今立 明宏

発行所：一般社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail ishikai@tsuruoka-med.jp

URL <http://www.tsuruoka-med.jp>